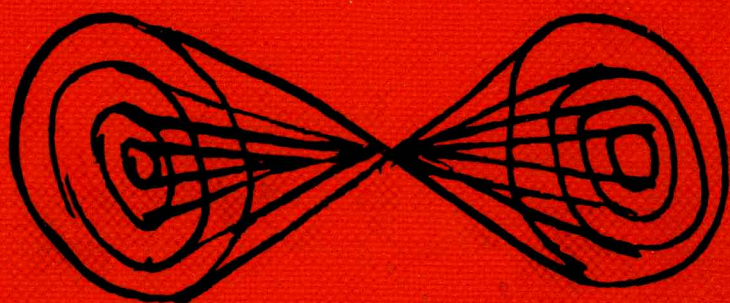




近代小説集★★

人生の小春日和 浜辺で 狐になった奥様
永遠の瞬間 コーベス 小市民の死 黒つぐみ
ウェルギリウスの帰郷 酔いどれ聖伝
コック大佐 家令候補者 新しい町 オノレ
・シュブラックの失踪 アムステルダムの水夫
ドニーズ クリスチーナ 操縦士と自然の力
ナジャ マルセイユのまぼろし ろう人形
紙ボール 孤独 話されなかった嘘
金持の青年 ロジキー爺さん 孤独な娘

斎藤光・海老池俊治・上田勤・松村達雄
渡辺健・高橋健二・川村二郎・佐藤晃一
中井正文・藤本淳雄・森川俊夫・山内義雄
・川口篤・江口清・若林真・渡辺一民
稲田三吉・清水徹・小林正・宮本陽吉・
野崎孝・西川正身・丸谷オ一 訳

世界文学大系

92

筑摩書房版

世界文学大系 92

近代小説集 ★★

1964年 7月 10日初版第1刷発行
1968年 10月 30日初版第6刷発行

編 者 平井正穂・佐藤晃一
小林 正・西川正身
発行者 竹之内 静雄
発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替 東京 4123 電話(291)局7651
郵便番号 101-91

CS 20092

目次

人生の小春日和	7
浜辺で	38
狐になった奥様	59
永遠の瞬間	93
コーベス	115
小市民の死	138
黒つぐみ	164
ウエルギリウスの帰郷	175
酔いどれ聖伝	183
コック大佐	204
家令候補者	217

森川俊夫	217	ヤ	藤本淳雄	204	ケ	中井正文	183	ロ	佐藤晃一	175	ブ	川村二郎	164	ム	高橋健二	138	ヴ	渡辺マ健	115	日	松村達雄	93	フ	上田勤	59	ガ	海老池俊治	38	マ	斎藤光	7	ゴ
森川俊夫	217	ヤ	藤本淳雄	204	ケ	中井正文	183	ロ	佐藤晃一	175	ブ	川村二郎	164	ム	高橋健二	138	ヴ	渡辺マ健	115	日	松村達雄	93	フ	上田勤	59	ガ	海老池俊治	38	マ	斎藤光	7	ゴ

裝
幀
庫
田
寮

ロジキ―爺さん

孤独な娘

解説

キヤザ
西川正身

374

ウエス
丸谷才一

399

大沢実・佐藤晃一
小林正・西川正身

439

近代小説集
★★

人生の小春日和

ゴールドズワージー
斎藤 光沢

夏のいのちはわずかの間に過ぎ去り行く

シェイクスピア

一

一八九〇年代初期の五月の最後の日、夕方の六時頃、ジョリオン・フォーサイト老人は、ロビン・ヒルの自宅で、テレスの前にあるかしの木の下に、坐っていた。ぶよが出てきてさされるまでは、この美しい午後ひと時を満喫しようと思っていた。彼の瘦せて、青筋立った褐色の手、長い爪の生えた華やかな指は、葉巻の端をはさんでいた。彼のこの先のことが、磨きあげた爪は、たとい指先でも、物に触れないことが上流の常であったヴィクトリア朝の初期の頃と、少しも変わっていなかった。はげあがった額、大きな白い口髭、こけた頬、それに肉のおちた長い顎は、古い茶のパナマ帽のかげになって、西日をさけていた。足は組んでい

たし、彼の様子は、どこからみても、落ち着いていて、一種優雅なところがあった。いかにも毎朝ハンカチーフに香水をふりかける老人らしかった。彼の足元には、一見ボメラニア種かと思ふちがえるようにふさふさとした白茶の毛の犬がうずくまっていたが、これは例のバルサザードで、この犬と老人は、最初は仲が悪かったが、歳月がたつとともに、今ではお互いに愛情を懷いていた。彼の椅子のそばに、ぶらんこがあり、その上にホリーの人形が腰掛けていた。この「とんまのアリス」と呼ばれていた人形は、上半身を膝の上に倒し、鼻を黒いスカートのなかにうずめて、悲しそうにしていた。可愛がられたことなどない人形だったので、こんなふうに坐らされても、べつにどうというわけでもなかった。このかしの木の下からは、芝生がなららかに傾斜してゆき、一面に羊歯が生えているところまでのびていた。この美しい羊歯の向うは、野原になっていて、下の雑木林にある池まで続いていた。この「みごとな、すばらしい」眺めに、スウィジン・フォーサイトは、ちょうどこの木の下から、五年前に、彼がアイリーニを連れて、この家を見に来たときに、目を見張ったのだった。ジョリオン老人は弟のこのとつびな行為について聞いていた——彼がアイリーニを連れて家を見に行ったことは、一族の噂話の交換されるフォーサイト「取引所」——ティモシンの家で、大評判になった。スウィジンの奴！あの男も去年の十一月に、たつた七十九で死んでしまった。それで、フォーサイト家の者の長

寿にも限度があるという疑い、アンお婆が死んだとき初めて生じたあの疑いが、またおこったのだ。死んでしまった——そして、後に残ったのは、ジョリオンとジェームズ、ロウジャーとニコラスとティモシー、ジュムリア、ヘスター、スーザンだけになってしまった。ジョリオン老人は考えた——「わしは八十五だ。だがそんな気はしないな、あの脇腹の痛むときは別だが」彼はしきりと昔のことを思い出していた。甥のソームズの悲運のもととなったこの家を買いつとり、三年あまり前に、このロビン・ヒルの家に住むようになって以来、彼は自分の齢を感じたことがなかった。来る春ごとに、若返るかのようだった。田舎に、息子と孫たち——ジューン、後妻との間にできた幼いジョリーとホリー——と暮らし、ロンドンの雑沓やフォーサイト「取引所」のおしやべりを避け、重役会議からは解放され、仕事をせずに遊んでばかりの楽しい雰囲気なかで、屋敷と二十エーカーの敷地に手を入れて、いよいよ住心地のよいものにしようと精を出す一方、ホリーとジョリーの御機嫌をとったりして暮らしているのだ。ジューン、ソームズ、ソームズの妻アイリーニ、それに不慮の死をげたボスィニー青年のあの長い悲劇が続いていたあいだに、ジョリオンの心を圧していた苦汁と不機嫌も、今ではすっかり払いのけられていた。ふさぎこんでいたジューンの気持ですら、ついに晴れた——今、父親と継母とスペイン旅行に出かけているのが、その証拠である。三人が出發すると、あとには、不

思議と申し分のない平和が残された。楽しいのであったが、それでいてどこか空虚なところがあった。息子がいないためだった。息子のジューは、今では、慰めと楽しみの種であり、愛すべき男であった。しかし婦人連は、最上の女でも、そういうわけか、少々神経にさわった。もちろんすばらしい女だと思って感服している場合は別である。

遠くでかっこうが鳴いた。数珠懸楊が、野原のいちばん手前の榆の木で鳴いていた。このあいだ芝刈りをしたと思っていたのに、もう雛菊やきんぼうが出ている！ 風も、南西の風になつていた——気持よく、すがすがしく吹いている！ 彼は帽子をうしろにおしやり、顎と頬に陽を当てた。どういうわけだか、今日は、仲間がはしかつた——美しい顔を眺めたかった。老人には、何もほしいものがないかのように、皆考えている。フォーサイト一族の者らしくない考えが、いつも彼の心に侵入してくるのだったが、今も、彼はこんなことを考えていた——「もうこれで十分だ、ほしいものはない、などということは決していないのだ！ 片足を墓につこんでいても、何かほしいものはあるさ、あたりまえじゃないか！」忙しい仕事から離れて、ここにこうして暮らしていると、孫や花、樹木、彼の所有地内の小鳥たちが、その上の太陽と月と星とはかくとして、日夜彼に向かつて、「開け、胡麻」と言っていた。そして胡麻は開いたのだ——どれだけかは、おそろく彼も知らなかった。彼は、「自然」と呼ばれ始めてい

たものに対して、いつでも、敏感であり、純粋な、ほとんど宗教的な反応を示していた。もつとも、どれほど深く感動しても夕陽をただ夕陽と言ひ、眺めをただ眺めとしと言わぬ彼の習慣を、いつまでも失うことはなかった。しかし近頃は、自然が実際に、彼に心のうづく思いを与えていた。彼はそれほどまでに自然を愛していたのだ。今日この頃の静かな、あかるい、日足の長い日には、ホリーと手をつなぎ、見つけたこともない獲物を一所懸命に探し求めている犬のバルサザーを前にして、毎日散歩に出かけ、咲きそめるばらや壁の上で蕾をふくらませている果樹、雑木林のかしの葉や若葉に照る陽光などを見まもったり、睡蓮の葉が開いて、きらきら輝くところや、ただ一つある小麦畑の銀色の若い穂を見まもったり、椋鳥や雲雀の鳴声に耳をかたむけ、オールダー種（オールド）の優良乳牛（ミル）にふさふさした尻尾をゆつくり振りながら、反芻しているのを眺めたりした。こうした美しい日には、こういう自然に対するまったくの愛情から、心が少しうずいたのだ。おそろく心の奥底で、自然を楽しめるのも、これからさきあまり長くはないのだと感じていたのだろう。いつか——おそろくこれから十年もたたないうちに、いや五年もたたないうちに、こういう世界を愛する彼の力が枯渇してしまう前に、この世界が、彼からとり去られてしまうだろうと考える、それが、いかにも不公平なことにように思えるのだった。そしてそのことが、彼の未来に暗雲のように立ちこめて、彼の心を暗くした。この

世の生活ののちに何か来るとしても、それは彼が望んでいるものではないだろう——ロビン・ヒルや花や小鳥や美しい顔ではないだろう——今でさえ、こういうものは、彼のまわりに、ごくわずかなものだ！ 年とともに、まやかしに対する彼の嫌悪の情はつのつてきた。彼が一八六〇年代に身につけた型通りの信仰も、髭が多すぎるというだけのことであくわえるようになった頬髭と同じことで、もうだいたいぶ前からのまにかななくなっていて、ただ三つのもの——美と正しい行為と財産に対する敬意が残されていた。そして今では、この三つのうちで最大のものは、美であった。彼はいつでも、広範囲にわたる興味をもっていて、実際今でも、「タイムズ」を読むことができたが、つぐみの鳴声（ミウ）がきこえようものなら、すぐにも「タイムズ」をほうり出してしまふことが多かった。正しい行為や財産は、どういうわけか、退屈なものだった。つぐみや夕陽は、けつして彼を退屈さなかつた。それどころか、つぐみや夕陽を十分に味わうことができないのではないかと、とうとう不安をおぼえるのだった。夕方の静かな輝きや、芝生に咲いている黄や白の草花を、じつと見つめていると、「最近カウエント・ガーデンで聞いた『オルフェオ』の音楽のようじゃないか」と思えてきた。「オルフェオ」は美しいオペラで、マイアベアともちがい、モーツァルトに似ているわけでもないが、それなりに、おそろくもつと美しいものなのだ。なにか古典的で、黄金時代の特色をおびており、清純でしかも芳

醇である。それにあのラヴォリイは「昔の時代にふさわしいといつてもよい立派な歌手だ」——これは彼が与えうる最高の讃辞であつた。オルフェウスは、その手から失われようとしている美を追い求めて渴望している——ちょうどこの世で愛と美が姿を消してしまふように、オルフェウスの愛妻が冥府において行こうとしていたからだ——彼の渴望は、歌となり、すばらしい音楽を通して打ちふるえていたが、その渴望が、この夕方、あたりにただよう、自然の美しさのなかにも、躍動していた。すると、彼は、キルク底で両脇にゴムの張つてある深靴の先で、思はずバルサザの肋骨のところをゆすつてしまつた。犬は目を覚まして、蚤をとり始めた。蚤などいはいはずなのだが、いるものときめこんでいたのだ。蚤とりがおわると、ひつ揃っていた場所を、主人のふくらはぎのところへこすり、自分をこついた靴の甲の上に顎をのせて、また坐りこんだ。すると、ジョリオン老人の心に、突然ある記憶が甦つてきた——三週間前に、あのオペラで見た顔——彼の大事な甥ソームズ、あの資産家の妻、アイリーニの顔であつた。スタナブ・ゲートにおける彼の前の家で、孫娘のジューンが、ボスイニー青年と不幸な婚約をした祝いの招待会の日以来、彼はアイリーニに会つていなかったのだが、彼は顔を見たとたんに彼女のことを思い出した。いつでも彼女のことを、とても美しい人として、讃嘆していたからである。ボスイニーの死後、彼女は、この青年の愛人として非難的になつていくくらいだか

ら、すぐさまソームズのもとを去つた、ということも彼は耳にしていた。その後あの女は何をしてゐるのだろう。前方の席にいた彼女の顔——横顔——を見たことは、この三年間に、文字どおり初めて、彼女がまだ生きてゐることを教えてくれたのだつた。誰も彼女のことを口にしなかつた。それでも一度、息子ジョーが、彼女のことを話してくれた——彼がすっかり驚いてしまつたような事柄だつた。息子はそのことを従兄弟のジョージ・フォーサイトから聞いたのちにちがひなかつた。ジョージは、ボスイニー青年が車にひかれたあの日、霧のなかで青年の姿を見たのだ。その話はこの青年の苦悩を物語る事件で、妻に対するソームズのおそろしい暴力行為のことであつた。ジョーは、あの日の午後、ボスイニーの死の知らせをきいたあと、ちよつとの間であつたが、アイリーニに会つていたのだ。そしてジョーからきいたその時の様子が、いつもジョリオン老人の心に残つていた——「取り乱して悲嘆にくれていた」とジョーは彼女のことを言つていた。翌日ジューンがソームズの家を訪ねた——自分の感情を抑えて訪ねたのだ。すると女中が、夜のうちに奥様がそつと家を出られて、どこかに行つてしまわれたと泣きながら話してくれた。まつたくの悲劇だ！ ソームズはけつて二度と彼女の身体に手を触れることができなかった、ということ——これだけは確かだ。ソームズは、ブライトンに住んでいて、ロンドンとの間を往復している——資産家にふさわしい宿命というものだ！

ジョリオン老人は、この甥に対してしたように、一度誰かに嫌悪の情をいだくと、絶対にその氣持を捨てなかつた。アイリーニが姿を消したという知らせをきいたときに、安堵の思いがしたことを、彼は今でも憶えていた。彼女があつた家の囚人であると考えるのは、おそろしいことであつた。あの家に、彼女は、さまよい戻つてきたのちにちがひない。ジョーが彼女にあつたときは、街頭で「建築家惨死す」という新聞の見出しを見たあとであり、傷つた獣が自分の巢穴にさまよい戻るように、あの家に少しのあいだが、さまよい戻つてきたのちにちがひないのだ。先夜見た彼女の顔は、彼の心を強くとりえた——記憶のなかの顔よりも、もっと美しかった。しかし仮面のような美しさで、その仮面の下に隠されたものが何かあつたのだ。まだ若い——二十八だろう。そうだ、今頃は新しい愛人が、きつとできているだろう。しかし、こんな妙なことを——結婚した女は、二度と恋愛などするものではない、一度でも、もう十分すぎるのだから——考えたとき、彼の靴の甲があたり、それとともに、バルサザが頭をもたげた。この利口な犬は、立ちあがつて主人の顔をのぞきこんだ。「歩くんですか」と言つてゐるようだつた。するとジョリオン老人は、「さあ、行こう！」と答えた。

例のごとくゆつくりと、彼らは、きんぼうげと雛菊の咲き乱れているなかに進んで、羊歯の茂つているところに入つた。ここは、まだ羊歯が十分生えそつていなかったが、芝生の斜面

よりほどよく低くなつていて、向うの芝生の斜面のところまで、上がつて行くようになっていた。そして庭園術にはきわめて重要な高低の印象を人に与えるようにできていた。この石や土は、バルザールが気に入っているものであつて、ときには、ここでもぐらを見つたりした。ジョリオン老人は、いつも必ずここを通つて行くことにしていた。まだ美しいとは言えなかつたが、いつかは美しくしようと思つていたので。彼はよくこんなふうに考へていた——「ヴァーに來てもらつて、見てもらわねばならん。あいつはピーチよりいい庭師だからな。」植物は、家屋や人間の病氣と同じで、最上の専門家にみてもらふ必要がある。この羊齒の茂っている土地には、蝸牛かたつむりがたくさんいた。孫たちを連れて、ここを通るとき、彼はよく蝸牛を指さしながら「お母さん、すももには足があるの」ときいた少年の話をしきかした。「ありませんよ。」「じゃ、きつとほく、でんでん虫、のんじやつたんだ。」「これをきいた孫たちが、でんでん虫がその兄の「赤いのだ」を通して行くところを想像しながら、面白そうに飛びはねて、彼の手をぎゅつと握りしめると、彼は目をきらきら輝かした。羊齒のところを出ると、彼は庭木戸を開いた。ここからは最初の野原になつていて、広い、公園のような土地である。その一部に、煉瓦塀に囲まれた野菜畑があつた。ジョリオン老人はここを避けた。畑はどうも今の気分になぐわなかつたので、丘を下つて池のほうに進んだ。水鼠を二匹、二匹捕えたことのあるバルザールは、

老人の前を飛びはねて行つた。その足つきは、毎日同じ道を通るふけこんだ犬特有のものだつた。水際まで来て、立つたジョリオン老人は、今日新しく咲いた睡蓮に氣がついた。明日はホリーにこれを見せてやろう。「彼の可愛い孫娘」は、ひるに食べたトマトのせいで加減が悪かつたが、明日はそれもなおるだろうと思われた——彼女は胃腸が弱かつたのだ。今では、ジョリオンも小学一年になり、学校に行つてしまつたので、ホリーがほとんど一日じゅう彼といつしよにいた。孫娘を家においてきた老人は、淋しくてしかたがなかつた。それに、例の痛みも感じていた。近頃はよくこれに苦しめられた——左の脇腹に鈍痛がするのだった。彼はふり返つて丘を見上げた。實際あのボスニー青年は、なかなかみごとな家を建てたものだ。生きていたら、きつと建築家として成功したことだろう！ 今はどこに在るのだ。おそらく、あいかわらずこのあたりに出沒しているのだろう。こは、あの男が最後に建てた家のあるところだし、あの男の悲恋の舞台なのだから。それともフィリップ・ボスニーの霊は、どこにでも現われるのだろうか。そうかもしれない。あの犬のやつ足を泥だらけにしている！ 老人は雑木林のほうに歩いて行つた。そこには一面にブルーベルの花が美しく咲いていたところがあつて、彼は、まだあちこちに、ちようど日差しもささげられる森の木の間から、ところどころ青空がのぞかれるように、ブルーベルの花が残っている場所を知つていた。彼は、そこにあつ

た牛舎や鶏小屋のわきを通つて、若木の茂みのほうへ行く小道をたどり、ブルーベルの咲いている場所へ向かつて行つた。また彼の前を歩いてきたバルザールは、低いうなり声をあげた。ジョリオン老人は、足で犬をこづいたが、犬は動かずにうずくまつていた。狭い道なので、犬のわきを通ることもできなかった。すると、犬の背の真中によつて、そのふさふさとした毛が、しだいに総立ちになつた。うなり声をきき、毛がふるい立つのを見たためか、あるいは、森のなかで感ずるあのひやりとした感じのためか、ジョリオン老人も、背骨のあたりにぞくつとするものを感じた。すぐ先で小道が曲がると、苦むした老木の丸太が見え、その上に一人の女が腰かけていた。向うをむいてゐたが、彼が「無断侵入だ——立札を立てなけりやならん」と考へているうちに、こちらを向いた。これは驚いた！ オペラで見た顔だ——ちようど今考へていた女じゃないか！ こうして彼が呆然としてしまつた一瞬、目先がぼんやりかすんでしまつた。まるで幽霊が現われたような、妙な氣持だ——たぶん女の重色をおびたグレーの着物に、日の光があたつてゐたためかもしれない！ すると、彼女は立ちあがり、頭を少しかしげて立つて、微笑してゐた。ジョリオン老人は考へた——「なんと美しい女だろう！」彼女は何も言わなかつた、彼も黙つてゐた。すばらしい女だと讃嘆の念をいだくとともに、彼は彼女がものを言わないわけを理解した。もちろん、思ひ出を求めて、ここにやつてきたのだ。そして、

つまらない説明などして、せつかくの思い出の世界をぶちこわしたくなかったのだ。

「犬に着物をさわらせちゃいけませんよ。足がぬれているのだから。さあ、おまえはこっちに来るのだ」と老人は言った。

しかしバルサザーは、お客のほうに進みよって行き、彼女は、手をさし出して、犬の頭をなでた。

「先だつての晩、オペラでお見かけしましたよ。あなたはわしに気がつかなかったが」

「いいえ、気がついておりました」

これをきいて、彼は、すこし得意になった。

まるで彼女が「あなたがいらつしやるのに気がつかない人がいると、お思ひですの」と付け加えたかのように感じたのだ。

「みんなスペインに行つてましてな」とやぶから棒に言った。「わし一人なのでね。あのオペラに出かけたのだが。ラヴォリイはすばらしいですね。牛舎を見ましたかね」

神秘的な、また感動的といつてよい出会いをしたわけだが、彼は本能的に、自分の財産である牛舎のほうに向かつて歩いた。彼女も彼と並んで歩いた。彼女は、容姿の美しいフランス婦人のように、少し身体をゆすつて歩いた。彼女の衣裳も、多少フランス人好みのグレーであった。彼は、彼女の琥珀色の髪の毛に、二筋三筋の白髪をみとめた。この髪の毛の色は、その黒茶の眼と青白いクリーム色の顔とに対して、奇妙な対照をなしていた。突然、彼女の物柔かい黒茶の眼で、横眼にみられると、彼の心は狼

狽した。まるで、遠い彼方から、あの世からと言おうか、ともかくこの世にはあまり関係していない人から、見られたように感じた。すると彼は機械的にこうきいた。

「今どこに住んでますか」

「チニルシーに小さなアパートを持っております」

彼は、彼女が何をしているのかききたくなかつた——いや、何もききたくなかつた。それなのに、変な言葉が出てしまった。

「一人ですか」

彼女はうなずいた。そうとわかるとほつとした気持だつた。そして、運命がいたづらをしなかつたならば、この女は、この雑木林の地主となり、訪問客の彼を、この牛舎に案内してくれたことであらう、と考えた。

「みなオールダーニ種でね。すばらしい牛乳が出ますよ。この牛は可愛いでしょう。ほれ、マートル！」

その薄茶色の牛は、アイリーニの眼のようなやさしい茶の眼をしており、乳をながいこといぼられていないので、少しも動かずに立つていた。二人のほうをふりむいて、そのきらきら輝く、おとなしい、皮肉な眼の片隅から、二人を見やつた。灰色の唇からは、よだれが、少しずつ、薬のほうへとたれて行つた。干し草と蠅よけのヴァニラとアンモニアの臭いが、ひやりとした薄暗い牛舎のなかに、におつてきた。するとジョリオン老人は、こう言った。

「ぜひ家にあがつて、わしと夕食をつきあつて

くださいよ。馬車で送つてあげましょう」

彼女が心のなかで迷つてゐる様子がわかつた。悲しい思い出があることだし、無理もなかつた。

しかし彼は彼女にいてほしかつた。きれいな顔、魅惑的な容姿、美しい女だ！ 彼は午後のおいだずつと一人きりだつた。彼の眼の色に、その心を読みとつたためか、彼女は、こう答えた。

「ありがとうございます。ジョリオン伯父様。そうさせていただきますわ」

彼は両手をこすりながら言った。

「それはありがたい！ じゃ、行きましょう。」

犬のバルサザーが先に進み、二人は野原を通過して、斜面を登つた。夕日が、今では、真横から、二人の顔を照らしていた。彼は、二、三筋の白髪ほかに、彼女の美しさを銀貨の線のように、細くこまかに刻みつけている程度の小じわも、見るこゝろができた——とくに独り住いの女に見られる顔であつた。「テレスのほうから連れて入ろう。普通のお客あつたいはしたくない」と彼は考えた。

「一日じゅう何をしていますか」と言つた。

「音楽を教えております。ほかに何も仕事がございますけれど」

「仕事ですか！」と言いながら、ジョリオン老人は、ぶらんこから例の人形をとりあげて、その黒いスカートのぼしてやつた。「仕事ほどいいものはありません。わしは、今では何もしていません。年ですからね。何の仕事ですか」

「不幸な目にあつた女の人たちを助けてあげよ

うとしていますの。」ジョリオン老人には、よくわからなかった。「不幸な目にあった女ですか」と言葉をくりかえしてきいた。すると、はつとして、自分がこんなふうに言う時と、同じ意味なのだとかわかった。ロンドンの夜の女たちを救おうというわけか！　なんて気味の悪い、おそろしい仕事だろう！　すると、こんなことはききたくないという彼の自然の情も、好奇心に負け、

「なぜです。なにをしてやっているのです」ときいた。

「べつにたいしたことでもございせん。そんなお金はありませんもの。ときどき、親切にしてあげたり、食事を出したりしております」

ジョリオン老人は、思わず手で財布を探した。せきこむように、「どこで、そういう女たちに会うんですか」と言った。

「更生施設にまいます」

「更生施設に！　それはたいへんだ」

「わたくしが、いちばん悲しく思うのは、あの人たちは、たいてい誰も、以前にはどこか美しいところがあった、ということでございますわ」

ジョリオン老人は人形をまっすぐのぼした。「美しいところがねえ！」と叫ぶように言った。「そうだ！　そのとおり！　可哀そうな連中だ！」こう言って、家のほうに向かって歩いた。

彼は、彼女の先に立つて、まだ日除けを上げていないフランス窓を、くぐるようにして、部屋に入った。そこは、彼がいつも、「タイムズ」やホリーの絵のお手本になる砂糖大根などの大

きな挿絵のついでに農芸雑誌を読む部屋なのだ。

「三十分くらいで夕食です。手でも洗いますか。ジューンの部屋に案内しましょう」

見ると、彼女は、しきりにあたりを見回していた。彼女がこの前この家に来たときは、夫といっしょだったのか、それとも愛人といっしょだったのか、あるいは三人で来たのか、それはともかく、それ以来家のなかが、どれだけ模様替えされたか、彼は知らなかったし、そんなことはわからなかった。そういうことはいっさい不明であったが、彼は不明なままにしておきたかった。だがどこが変わったのだろう！　ホールで彼はこう言った。

「息子のジョーは画家でしてね。なかなか趣味があるんですよ。もちろんわしの趣味とはちがうが、好きなようにさせているのです」

彼女は、じつと立って、ホールと今では音楽室に使われている部屋が、大きな天窓の下で、一つにつながっている様子を、しげしげと見回していた。彼女の姿は、ジョリオン老人に奇妙な印象を与えた。彩色がすべて真珠色のグレーと銀色になつているこの部屋の暗がりから、この女は、誰かの霊をよびおこそうとしているのではないのか。彼自身は、もつとあざやかな、金色一色の彩色にしたかったのだ。だがジョーの趣味はフランス的で、そのために、こんなほやけたものになり、あの男がいつでも吸っている煙草の煙が立ちこめているような具合で、そこにとどころ鮮やかな青や深紅の色がのぞい

ているというわけなのだ。こんなものは、彼自身が懐いていた夢ではなかった。彼が空想のなかで、この壁にかけていた絵は、大きな画面ということがたいせつであった時代に彼が買った落ち着いた静物画の金の額縁入りの傑作であった。その傑作はみな、今、どこにあるのだろう。二束三文で売り払ってしまったのだ！　時代とともに進もうという、フォーサイト一族のなかでは彼だけが持っていたあの気持から、そういう傑作をいつまでも手元におこうとしてはいけないと思うようになったからだ。だが、自分の書斎には、あいかわらず「日没時のオランダ漁船」をかけていた。

彼はアイリーニといっしょに階段を登り始めた。例の鈍痛がしたので、ゆっくりと進んだ。「ここは風呂場やなにかです。タイル張りになりましたよ。子供部屋はあそこです。それから、ここはジョーとあれの家の内の部屋。みんな続いています。おぼえているでしょうね」と言った。アイリーニはうなずいた。二人は廊下を通って行き、小さなベッドと窓がいくつかある大きな部屋に入った。

「わしの部屋です」と彼は言った。周囲の壁には子供たちの写真や、水彩のスケッチが、ずらりとかけてあった。彼はためらいがちに、こうつけ加えて言った。

「これはジョーのスケッチですよ。いい眺めですね。天気がいいと、エプソム競馬場の大見物席が見えますぜ」

太陽はもう家のうしろに沈み、あたりにはほ

の明るいもやがたちこめていた。日足の長い快晴の日が暮れると発生するもやだ。家はあまり見えなかったが、野原や樹木が、ぼうつと見える丘のほうまで、ほのかに光っていた。

「田舎はほとんど変わってゆくが」と彼は突然言い出した。「わしたちがみんな死んでしまっても、田舎はいつまでも、なくならないわけですな。ほら、あそこにつぐみがいますよ——ここでは毎朝小鳥がよく鳴いてね。ロンドンと縁を切って、いいことをしましたよ」

アイリーニは、顔を窓枠に近づけていた。その沈んだ表情を見て、彼ははつとした。そして「楽しい顔つきにしてやりたいものだ」と考えた。「きれいな顔だが、さびしそうだ。」彼は湯の入った水差しをとりあげて、廊下に出た。

「これはジュニンの部屋です」と言って、隣の部屋の戸をあけ、水差しをおいた。「いり用のものは、みなあると思いますよ。」こう言って、戸を閉め、自分の部屋にもどった。黒檀製の大型ブラッシで髪の毛をなでつけ、顔に香水をふりかけてからは、彼は考えにふけた。アイリーニが来たのは、本当に不思議な縁だった——神秘的でロマンチックと言ってもいい神の特別の取り計らいのようなものであった——まるで、話し相手がほしい、美しいものを見たい、という彼の願いが、神であれ何であれ、そういう願いをかなえてくれるものによって、かなえられたようなものだ。こんなふうに思いながら、鏡の前で、まだまっすぐな身体をびんと張り、ブラッシで白い口髭をなで、まゆ毛に香水をすり

こみ、それからベルをならした。

「夕食に御婦人のお客様のあることを言い忘れたが、コックに何か特別の料理をつくるように頼みなさい。それから、ビーコンに、十時半に二頭立てのランドー馬車を用意し、お客様を今夜ロンドンにお送りするように、言いなさい。ホリーお嬢様は、ねむってるかね」

女中はねむっておられないと思うと答えた。そこでジョリオン老人は、廊下を通過して、子供部屋のほうに、そつと忍び足で近づき、戸を開けた。この戸の蝶番にはとくに油をきらさぬようにしておいて、夜、音をたてずに、こつそり出入りできるようにしてあった。

しかしホリーはねむっていた。小型の聖母マリアのような寝顔であった。昔の画家たちが、マドンナの像を描きあげたとき、ヴィーナスの像になつてしまったのではないかと感じたような、美しいマドンナだった。黒い長いまつ毛が頬の上にかかり、いかにも安らいだ顔つきだし——胃腸のほうは、もうすっかりよくなった様子だった。ジョリオン老人は、夕暮のうす明るい部屋のなかに立って、ホリーの寝顔にほれぼれと見とれていた。とても魅力があり、威厳があり、愛らしい、小さな顔であった。幼い者のなかに自分の生命を更新してゆくという能力に、彼は人並み以上に恵まれていた。幼い者たちは彼にとつて、自分の未来の生命であり、未来の生命のすべてであるということを、おそらく彼のキリスト教的ではないが根本的な良識が認めていたのだ。彼女の前途には、すべてのものが

備わっている。彼の血も——多少は——彼女の小さな血管に流れているのだ。この彼の小さな友達を、彼としてできるかぎり幸福にしてやり、愛情しか知らない女にしてやらねばならない。彼は胸がいっぱいになってきた。エナメル皮の深靴が音をたてないようにと、そつと歩いて部屋を出た。廊下では、妙な考えに襲われた。あの子が、アイリーニが援助の手をさしのべているという女たちのようになつたらどうしよう！女たちはみな、一度は、ここに眠っているあの子のようなかわいい娘だったのだ。「小切手をやらなければいけない。みじめな女たちのことを考えるとたまらなくなる」と彼は考えこんだ。可哀そうなあの日蔭者の女たちのことは考えるにしのびない。考えると、財産というものを避けるにしのびない。考えると、真に高雅な精神の奥底まで深く傷つけられるし、彼が心にくく感じているもの——美しいものに對する愛——をいたましいほどに傷つけられるのだ。この愛は、今でも、美しい女とともに一夜をすごすことを考えるのだ、彼の心にとぎめきを与えることができるのだ。彼は下において、自在ドアを通じて家の裏手に行った。ここには葡萄酒貯蔵室があり、一本少なくとも二ポンドはするホッホハイム酒——ヨハニスバークよりはるかに上等のシュタインバーク・キャビネ印があつた。すばらしい香りの葡萄酒で、ネクターリンの香りがする——まったくの美酒だ！赤ん坊をだきかかえるかのように、一本とり出し、明るいところで、眼の高さまで持ち上げて、ながめた。

ほこりをかぶったその芳醇な色の、首の細い酒瓶を見て、彼はすっかり御満悦であった。ロンドンから持って来て以来、さらに三年もおいておいたもので、絶好の味になっているにちがひなかった。彼がこれを買ったのは、三十五年前だった——ありがたいことに、まだ酒の鑑識力はあるし、したがってこれを飲む権利があるのだ。アイリーニも喜ぶだろう。十本のうち一本だつて酸っぱいのではないさ。彼は瓶をふいて、手でキルクをぬき、鼻をもつていつて香りをかいでから、音楽室にもどつた。

アイリーニはピアノのそばに立つていた。彼女は来た時につけていた帽子とレースのスカーフをとつていた。そのために金髪と青白い首筋がよく見えた。グレーの着物を着て、紫檀のピアノをうしろにした彼女は、ジョリオン老人の眼に、美しい絵のように映つた。

老人は、彼女の腕をとり、儀式はつて、食堂に入つた。二十四人の人が、ゆっくりと食事ができるように設計されていたこの食堂に、今は円い小卓だけおいてあつた。近頃は一人だけだったので、大きな食卓は老人の気持ちを圧迫した。息子たちが帰国するまで、ほかに移させてしまつた。ここでラファエロのマドンナ像のすばらしい二枚の模写を相手に、ひとりでもいつも食事をしていた。この夏の季節には、食事時だけが一日のあいだで、楽しみが感じられないときであつた。彼は食の太い男ではなく、あの大男のスイーデンやシルヴェーナス・ヘイソーブやアントニー・ソーンワージーといった旧友たちと

はちがつていた。そこで、二人のマドンナに見おろされて、食事をするのは、まったく悲しい仕事であつて、彼はこの仕事をさっさと片づけ、コーヒーと葉巻というものと精神的な楽しみを味わおうとした。しかし今夜は別であつた。小さなテーブルごとに、眼を輝かせてアイリーニを眺め、イタリーやスイスを話題にもち出し、そこを旅行したときの話や、息子や孫娘はもう知つているので、彼らには繰り返して話せないさまざまな経験談を話してきかされた。この新しい聴き手は、彼には貴重な存在であつた。彼は、老人にありがちな、いつまでも思ひ出話を繰り返すといったようなことは、けつしてしたことがなかつた。彼自身無神経な話し手には、すぐ退屈してしまうので、他人を退屈させまいという気持を本能的にもつていた。それに、美しいものには、生来浮気心を持つていたので、婦人と話をするときは、とくに用心していた。アイリーニにしゃべらせたいとは思つていたが、彼女が口ごもつたり微笑したり、彼の話喜んで耳を傾けている様子を見せられても、どこか近づきがたい神秘的なところがあるのに、彼はすつと気づいていたし、そこに、彼女の魅力の大半があるのだと思つた。彼は、あらわな肩を誇示して、しげしげと相手を見つめながら、まくしたてる女たちには、我慢できなかった。それに、独断的な態度でものを言い、ばかに物知りな手ごわい女たちも御免であつた。女のもつていゝるもので、彼の心をひくた一つのもの、女の魅力であつた。それが静かなものであれば

あるほど、彼はひかれた。彼の前にいた女は、そういう魅力をもつていて、彼がかつて愛したイタリーの丘や谷に輝く午後の日差しのように陰影に富んでいた。彼女が、いわば世間を離れて淋しく暮らしているのだと思つたことも、彼女を、自分にとっていつそう近しい存在にし、不思議なほど楽しい話し相手にした。男は老齢に達し、若い男と、女を張りあつても勝ち味がなくなると、若い競争手を心配する必要があるといふことがたいせつになる。年はとつても、美しい人に自分をいばん重んじてもらいたいと願つてゐるからだ。ジョリオン老人は、ホッホハイム葡萄酒を飲み、アイリーニの口もとを見まもり、若返つたように感じた。しかしバルサザーも彼女の口もとを見まもつており、心のなかで、二人の話の途切れるのを軽蔑したり、自分の嫌いな黄色い液体のなみなみとつがれた緑色のコップを、二人が傾けているのを軽蔑していた。

二人が音楽室にもどつてきたときには、そこはもう暗くなりかけていた。葉巻を口にして、ジョリオン老人は、

「ジョバンをなにか弾いてください」と言つた。

愛用の葉巻と愛好する作曲家によつて、男の性格の生地といったものがわかる。ジョリオン老人は強い葉巻やワグナーの音楽に我慢できなかった。彼の愛したものは、ベートーヴェン、モーツァルト、ヘンデル、グルック、シューベルト、それになにかわけがあつて、マイアベアのおペラ、などだつた。ところが、近年は、シ